

移民家族におけるジェンダー関係の葛藤

——在日フィリピン人男性に注目して——

中京大学 三浦綾希子

1. 研究の目的と課題

2018年6月末の在留外国人統計によれば、日本に居住するフィリピン国籍者の数は26万6803人であるが、その約70%が女性である。1980年代以降、「興行」資格で来日した女性たちが日本人男性と結婚し定住していったため、フィリピン系の場合、圧倒的に女性の数が多くなっている。こうした状況を踏まえ、これまでの在日フィリピン人研究は、エンターテイナーとして来日した女性の労働や結婚後の生活などに主な研究関心を寄せてきた。しかし、歴史を紐解くと、最初に日本にやってきたフィリピン人は、米軍基地で働く男性のバンドマンであり（永田2007）、1970年代のフィリピン人入国者数は、男性のほうが多かったと言われる（武田2005）。しかしながら、フィリピン人男性がいかなる経路で来日し、来日後、どのような生活を送ったかはこれまで十分に明らかにされてこなかった。そこで本報告では、在日フィリピン人男性に注目し、その来日経緯とその後の日本での生活について特に夫婦間のジェンダー関係に注目して分析を行う。

2. 研究対象

対象となるのは、首都圏に在住する30代～50代のフィリピン人男性6名である。報告者は2010年より対象者たちが通うエスニック教会での参与観察を続けてきた。本研究はこうした継続的調査の延長上にある。

3. 分析結果

フィリピン系の場合、女性のほうが日本で職を得やすいため、女性が先に日本に移住し、その後、家族や親族の男性が呼び寄せられるという移動パターンが存在する。特に妻が先に移動し夫が呼び寄せられる場合、女性のほうが経済的に、あるいは法的に（在留資格の問題）、立場が強くなるため、ジェンダー関係に葛藤が生じる。こうした葛藤を解消するにあたっては、2つのパターンがある。1）フィリピンの伝統的ジェンダー規範から逸脱している状態の中、なんとか家庭内で自分の男性としての地位を確保しようとするパターンと、2）家庭外（教会、NGOなど）に自分の威信を高める居場所を求めるパターンである。前者の場合、ジェンダー規範から逸脱している現状を例外的なものとして捉え、将来的には自分が稼ぎ頭となると語ったり、父親としての威厳を示すことで男性性を維持しようとしたりする。後者においては、家庭外のより広いコミュニティの中で、活動を活発化させることによって、男性としての地位を確保しようとする。あるいは、フィリピン本国へ寄付をするというNGO活動を通して、経済力のある男性として振る舞い、自らの男性性を維持しようとする場合もある。また、エスニックコミュニティ内の他のフィリピン人男性との関係がかれのジェンダーアイデンティティの再構築に大きな影響を及ぼしていることも明らかになった。